気中での Ozone-Terpene 類の化学反応モデリングと数値予測 (その 2) 二分子反応モデルを用いた Ozone-Limonene 反応量の数値予測

数値解析 オゾン リモネン

1. 序

本報では前報(その1)に引き続き Ozone ならびに Limonene の化学 反応量と濃度分布に関する検討を行う。特に本報では模型実験に 対応する数値解析結果に関して報告する。

2. 化学反応のモデリング

2.1 二分子反応と Rate Constant による反応モデリング

Ozone と Terpene 類の反応は二分子反応と見なすことができる。この最も簡易な化学反応のモデリングは、Rate Constant(反応速度定数)によるもので輸送方程式中の Source Term として(1)式のように表現可能である。

$$S_1 = S_2 = -k_b \cdot \overline{C}_1 \cdot \overline{C}_2 \tag{1}$$

ここで、 S_1 ならびに S_2 は化学物質1ならびに2の輸送方程式中の Source Term、 C_1 ならびに C_2 は対象化学物質濃度 [ppm]を示す(オ ーバーバー(⁻)はアンサンブル平均値を示す)。 k_b は Second Order Rate Constant (二次反応速度定数) [1/ppm/sec]であり、本報で対象と する Ozone と Limonene の反応は1:1であると仮定している。

さらに、反応による生成物質の濃度(仮想全生成物質)を C_p [ppm] とすると、その輸送方程式は(2)式、反応生成物の時間変化量は質 量バランスより(3)式で表現される。

$$\frac{\partial \overline{C}_p}{\partial t} + \frac{\partial \overline{U}_j \overline{C}_p}{\partial x_j} = \frac{\partial}{\partial x_j} \left(\left(D_p + \frac{v_t}{\sigma_t} \right) \cdot \frac{\partial \overline{C}_p}{\partial x_j} \right) + S_p$$
(2)

$$S_P = k_p \cdot \overline{C}_p = k_b \cdot \overline{C}_1 \cdot \overline{C}_2 \tag{3}$$

ただし、(2)式および(3)式で表現される C_p は仮想的に物質 1 (C_l) および物質 2 (C_2)が反応直後にその場で生成されると仮定した仮 想的な最終生成物質濃度を表現している。言い換えれば、(3)式は 中間生成物質の移流・拡散が無視でき、物質 1 (C_l)ならびに物質 2 (C_2)の Sink がその場での C_p の生成となることを仮定している。

2.2. 壁面沈着 flux のモデリング

本報では、Ozone ならびに Limonene を対象とした居室型模型実験 を対象とした数値解析を行うものであり、その正確な予測のため には気中での化学反応モデルに加え、模型壁面に対する沈着現象 をモデル化して組み込む必要がある。本報では Ozone ならびに Limonene の固体壁面に対する沈着現象は、既往研究^{×1)}で報告し た分子運動論をベースとした沈着フラックス式を適用する。

$$J = -\frac{\gamma \cdot \frac{\langle v_T \rangle}{4}}{1 + \gamma \cdot \frac{\langle v_T \rangle}{4} \cdot \frac{\Delta y_1}{D_1}} \cdot C_1 \Big|_{y = \Delta y_1}, \ \langle v_T \rangle = \left[\frac{8RT}{\pi M}\right]^{\frac{1}{2}}$$
(4)

ここで、yは Reaction Probability [-]、 $\langle v_T \rangle$ は対象化学物質分子の 平均熱運動速度(Boltzman 速度とも呼ばれる) [m/s]、Rは気体定数 [8.3145 J/mol/K]、Tは絶対温度 [K]、 π は円周率、Mは対象化学物



〇正会員 菊池世欧啓*1

表1 計算ならびに解析条件

Turbulence Model	Low Re Type k-ɛ model (MKC model, 2-Dimensional Cal.)
Mesh	$220 (x) \times 110(z)$
Scheme	Convection Term: QUICK
Inflow Boundary	$U_{in} = 3.0 \text{ [m/s] and } 2.0 \text{ [m/s]}$ $k_{in} = 3/2 \times (U_{in} \times 0.015)^2,$ $\varepsilon_{in} = C_{\mu} \times k_{in}^{3/2} / l_{in}, C_{\mu} = 0.09,$ $l_{in} = L_0 \text{ (Slot Width: } 0.02) \times 1/7$
Outflow Boundary	U_{out} = free slip k_{out} = free slip, ε_{out} = free slip
Wall Treatment	Velocity; No-slip, $k\Big _{wall}$; no slip, $\varepsilon\Big _{wall} = 2\nu(\partial\sqrt{k}/\partial y)^2$ $\gamma=2.1 \times 10^{-5}$ [-] (Limonene) $\gamma=3.4 \times 10^{-6}$ [-] (Ozona) $\langle v_T \rangle = 213.4$ [m/s] (Limonene) $\langle v_T \rangle = 360.0$ [m/s] (Ozone)

質の分子量、 Δy_1 は壁面第一セルの定義点距離 (y⁺ (Wall Unit)<1 の条件で設定)を示す。

3. 数值解析概要

前報(その1)で報告した居室模型実験は、流れ場ならびに化学物質の拡散場の2次元性が確保されているため、数値解析は2次元にて行う。解析対象空間の概要を図1に示す。吹出スロット幅を代表長さ(L_{eff} 20mm)とした場合、(x)×(z)=75 L_0 ×50 L_0 (=1500mm×1000mm)の2次元居室となる。流れ場は低Re型k- ϵ model (MKC model)により定常解析する。計算および解析条件を表1に示す。解析は実験と同条件とするため、吹出口位置にOzoneの発生源を、床面位置にLimoneneの発生源を設置する。また壁面はOzoneならびにLimoneneの沈着面と仮定する。室温は一定と仮定する。Second Order Rate Constant および壁面吸着の有無により設定した解析ケースを表2にまとめて示す。Case b は床面から発生したLimonene に対し、(4)式で示した壁面沈着モデルを使用せず、沈着無しの条件(Free Slip 条件)で解析を行うケースである。Case1 からCase3 は表1で示した実験ケースと対応する解析ケースであり、



排気口濃度(Cext)、室平均濃度(Cave)ならびに除去割合の数値解析結果 表 2

0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 0.4 04 0.4 0.4 0.4 0.4 04 04 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 0.3 Prediction 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0.1 0 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 C[ppm] 0.25 0 0.2 0.25 0.3 C[ppm] 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 C[ppm] 0.2 0.25 0.3 C[ppm] 0 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 C[ppm] 0.2 0.25 0.3 C[ppm] 0.3 C[ppm] 0.4 0.5 C[ppm] (2) Case 2-2 (6) Case 2-3 (1) Case 1-2 (3) Case 3-2 (O) (4) Case 3-2 (L) (5) Case 1-3 (7) Case 3-3 (O) (8) Case 3-3 (L) 図2 x=750mm 位置の Ozone ならびに Limonene の濃度分布比較 (z=0~1000mm、CFD と実験結果)

添え字(a)は数値解析ケースであることを示している。

Ozone ならびに Limonene の SUS304 に対する Reaction Probability (y)は筆者らの実験データを適用する(前報(その1)の注釈参照)。ま た Ozone ならびに Limonene の Second Order Rate Constant は Atkinson らの測定データ($k_b=2.1 \times 10^{-16}$ [cm³molecules⁻¹sec⁻¹]= 5.1× 10⁻³ [1/ppm/sec]、23℃)を適用して解析を行う。

4. 数値解析結果

4.1 流れ場の解析結果

本解析では、床面近傍では粘性低層まで解析するため壁座標 y⁺=1 以内に1メッシュ以上確保している。図は割愛するが、低 Reynolds 数型 k- ε model による解析は、模型内流れ場を十分な精度で再現 することを確認している。

4.2 模型内濃度分布解析結果

図2に x=750mm 位置における Ozone ならびに Limonene の濃度分 布比較を示す。吹出口から供給された Ozone の濃度分布と比較し て、床面から発生した Limonene は、模型内で大きな不均一濃度分 布を形成する。特に Limonene のみを発生させた Case 2-2 (図 2(2)) ならびに Case 3-2 (図 2(4))において実験結果と数値解析結果の若 干の差が見られるものの、二分子反応モデルによる数値解析結果 は、Ozone ならびに Limonene の反応による濃度低下現象を精度良

く再現することが確認された。

換気効果と Ozone および Limonene の除去割合 4.3

数値解析結果を基に、各解析ケースにおける Ozone ならびに Limonene の換気による除去割合、壁面沈着による除去割合、二分 子反応による除去割合を算出した結果を表2にまとめて示す。 吹 出風速 U_m=2.0 m/s のケースでは二分子反応による除去割合は 4% 程度であり、Limoneneの壁面沈着割合24.6%ならびに換気除去割 合 71.4%と比較して相対的に小さい値となった。吹出風速 Um=3.0 m/s のケースでは換気量増加に伴う換気除去効果が増加し、名目 換気時間の低下に伴い壁面沈着割合、化学反応割合が低下する結 果となった。

5. 結論

2 次元居室模型実験を対象とした数値解析を実施した結果、壁面 沈着モデルならびに二分子反応モデルを用いた Ozone、Limonene の濃度分布予測結果は十分な精度で実験結果を再現することを確 認した

注[1] 本報の定式化では濃度単位として体積濃度比 ppm を使用(体積濃度 比 V/V_{air} = モル分率 n/n_{air} =分圧比 p/P)。また一般に、Second Order Rate Constant (二次反応速度定数)の単位系として[cm³molecule⁻¹sec⁻¹]が用いられ る場合が多い。本研究では濃度単位系として ppm を使用しているため、単 位系をそろえて理解を容易にするため Second Order Rate Constant の単位と て[1/ppm/sec]を使用。

参考文献は前報(その1)にまとめて示す。